

聖母女子短期大学紀要

第 3 号

1 9 9 0

聖母女子短期大学

【原 著】

自尊感情と学習環境に関する研究（その4）

——私立看護短大生2校間の比較を通して——

(A Study on Self-Esteem and Learning Environment of Nursing Students (No.4))

——Comparative study on the two different Nursing Catholic Women's Junior Colleges——

天使女子短期大学 和田サヨ子 (Sayoko Wada)

文部省統計数理研究所 高木 廣文 (Hirofumi Takagi)

ニューヨーク大学看護学部博士課程 筒井真優美 (Mayumi Tsutsui)

聖母女子短期大学 沢 禮 子 (Reiko Sawa)

検討した。

I はじめに

看護短期大学の3年間は、青年期にある看護学生のアイデンティティの確立にとって、重要な意味を持つと思われる。看護学を学ぶ看護学生の看護実践体験においては、ともすれば青年の力量以上の判断力や自制心が求められる。したがって、ストレス状況の多い看護学生の学習環境は、学習効果および成長に大きく影響するものと思われる。

Rogers, C. R. によれば、感情や体験が自己概念に矛盾する場合、環境に対する否認が生じるものとされる。¹⁾ この点から看護学生に関しても学習環境の受容には、自己概念が重要な役割を持つものと考えられる。

自尊感情とは、自分の価値に関するその人の知覚であり²⁾、自己概念の重要な部分を占めている。自分を価値あるものとしてとらえ、他人から尊敬されていると感じる人は、環境を受容し、環境に積極的に適応していくものと考えられている。^{1), 3)}

我々は、これまで看護学生の自尊感情と学習環境に関する一連の研究によって、本学の聖書的アプローチと学生の看護への適応、アイデンティティへの内省化の傾向を確認した。^{4) - 6)}

本研究では、本学と教育理念、設立主旨が同一であるが、学生寮を有する本学と学生寮の無い北海道のT看護短大とを比較することにより、学習環境の相異による学生の看護への適応状態の差を

II 対象と方法

東京都内の私立看護短大生3年制（全寮制）本学S校（以下S校とする）と北海道内の私立看護短大制（学生寮なし以下T校とする）1986年度の2学年～3学年の学生を対象として（表1）、7月と3月の2回にわたり、質問紙による調査を行った。なお回収率は、欠席者を除き100%であった。質問紙は、49項目からなり自尊感情の測定は、信頼性の検討がなされている遠藤ら（1974）の自尊感情尺度⁷⁾（Q1～23）を使用した。また学習環境としては、波多野⁸⁾伊藤⁹⁾坂口¹⁰⁾らが調査項目としてとりあげている教師や友人との対人関係、看護への適応等に関する項目（Q24～33）を設定し、さらに日常生活における聖書的アプローチに関する項目（Q34～46）を設定した（表2）。臨床実習に関する項目（Q47～49）を加え、各項目間の選択肢は、「はい」、「ときどき」、「いいえ」の3段階とし、因子分析にはそれぞれ

表1 調査時期別、学年別対象者数

時期 学年	S 校		T 校	
	7 月	3 月	7 月	3 月
1 年(人)	45	41	49	48
2 年(人)	41	40	47	43
3 年(人)	38	38	42	47
計(人)	124	119	138	138

3, 2, 1の各得点を与えた。

表2 看護学生への質問紙

該当するところに○印をつけて下さい。

1. 1年 2. 2年 3. 3年

以下の質問の該当する答に○印をつけて下さい。

1. あなたが知っている大部分の人びとに比べて自分の方が劣っていると感じるようなことはありますか。
2. あなたは、自分が価値ある人間であると感じていますか。
3. あなたは、自分の知っている人びとが、いつかはあなたを尊敬の眼をもって仰ぎみる日がくると確信していますか。
4. あなたは自分の過誤（ミス）はいつも自分のせいだと感じる場合がありますか。
5. あなたは自分について落胆するあまり、何が一体価値あるものだろうと疑いをおぼえることがありますか。
6. あなたは自己嫌悪をおぼえること（自分で自分がいやになること）がありますか。
7. 一般に、あなたは自分のいろいろの能力について自信をもっていますか。
8. あなたは、自分にはうまくやれることなど全然ないといった気持になることがありますか。
9. あなたは、自分が他の人びととどのくらいうまくやっていけるかということについて気にしますか。
10. あなたは、あなたの仕事ぶりや成績を審査する立場にある人の批評を気にしますか。
11. あなたは、他の人びとがすでに集って話し合っている部屋に自分一人ではいっていきような場合、気兼ねや不安を覚えますか。
12. あなたは人前を気にしたり、はにかみをおぼえることがありますか。
13. あなたは、クラスや自分の同年輩の人びとのグループの前でしゃべらなければならないとき、心配したり不安に思ったりしますか。
14. 他の人びとがみているところで、ゲームやスポーツをやっており、それに是非勝とうと思っている場合、あなたはとり乱したりまごついたりしますか。
15. 他の人びとから、あなたが職業や経歴における成功者（または優等生）とみられているか、あるいは失敗者（劣等生）とみられているかということについて、あなたは気になりますか。
16. 人といっしょにいるとき、あなたはどんなことを話題にしたらいいかについて困りますか。
17. とんでもないミスやばかにされるような大失敗をしてかしたとき、あなたは長くそのことを気にしますか。

18. あなたは、初対面の人に会ったとき、時間つぶしに話をするのがむずかしいですか。
19. 他の人があなたと一緒にいることを好んでいるかどうかについて、あなたは気にしますか。
20. あなたは恥ずかしくてどうにもならないと思うことがありますか。
21. 自分の意見に同意しない人びとを説得している場合、あなたは自分が相手にどのような印象を与えているかということが気になりますか。
22. あなたの友達や知りあいのなかに、あなたのことをよく思っていない人がいるかもしれないと考えるときあなたはそのことを気にしますか。
23. 他の人があなたのことをどのように考えているかということが、あなたは気になりますか。
24. 看護という職業はあなたを生かすものだと思いますか。
25. 病院実習は好きですか。
26. 自己学習活動や実習に関する日報その他の課題はあなたにとって適当な量だと思いますか。
27. 先生とのコミュニケーションに満足していますか。
28. 先生とのコミュニケーションを持っていますか。
29. 学校で友人関係に満足していますか。
30. 学校での相談できる友人はおよそ何人いますか。
31. 学校での相談できる先生がいますか。
32. 看護職に進むことに誇りを感じますか。
33. 大学での専門の勉強は楽しいですか。
34. 聖書のみことばは両親、自分の存在について感謝の念を増させるものです。
35. 聖書のみことばは看護職に対する「ほこり」を増させるものです。
36. 聖書のみことばは看護職について専門職である以上に「天職への召命」ということをうらづけますか。
37. 聖書のみことばは医療の複雑な判断を要求される臨床場面で具体的な判断基準の指針となりますか。
38. 朝の祈りは、あなたの1日の始まりに“力”を与えていますか。
39. 夕の祈りは、あなたの1日の終わりに“感謝”を与えていますか。
40. 朝礼に参加することにより、自分に対する感情は肯定的になっていくように思いますか。
41. 聖書は、あなたがケアをする上で指針になりますか。
42. 日常生活の人間関係における問題解決は、聖書が基盤になっていますか。
43. 聖書のみことばによって不安になることがありますか。
44. 聖書に親しむことによって、悩みや葛藤に対する気持は強くなるように思いますか。
45. 聖書によって、友人、教師との人間関係は、日常

生活で気になる問題として意識されますか。

46. 聖書に観る人間像と自己像との不一致による葛藤で悩みますか。
47. あなたは病院のスタッフ、婦長、指導者（病院、学校側含）との人間関係で脅えを感じますか。
48. 看護技術および処置の実施に対して緊張しますか。
49. 受持看護で患者とのコミュニケーションに緊張を感じますか。

分析は、各校の調査時期と学年により、因子分析（バリマックス法）を行い、さらに抽出した因子の因子得点を求め、各校、各学年毎、調査時期毎の差を調べるために分散分析を行った¹¹⁾。実際の計算は、パソコン用統計学パッケージHALB AUを用いた。¹²⁾

図 1-a 第 1 因子の因子負荷量の高い項目

- Q 34 聖書は感謝の念を増させる
- Q 41 聖書はケアの指針
- Q 35 聖書は看護職に対する誇りを増させる
- Q 36 聖書は「天職への召命」とする
- Q 42 人間関係は聖書が基盤
- Q 39 夕の祈りは感謝を与える
- Q 40 朝礼により自己肯定
- Q 38 朝の祈りは力を与える
- Q 37 聖書は臨床場面での判断の指針
- Q 45 聖書によって人間関係が気になる
- Q 44 聖書による葛藤
- Q 46 聖書と自己像の不一致による葛藤
- Q 43 聖書による不安
- Q 32 人間関係は聖書が基盤
- Q 25 実習が好き
- Q 28 先生とのコミュニケーションがある

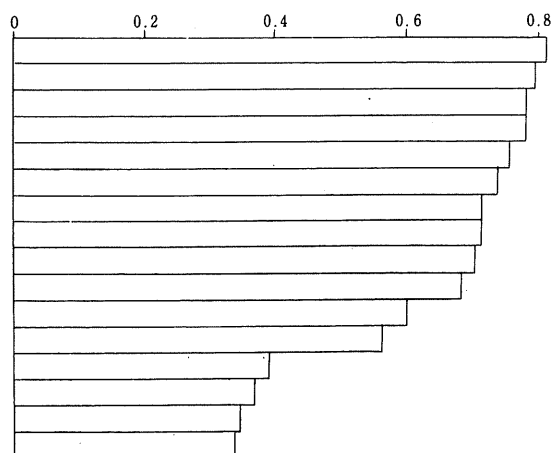


図 1-b 第 2 因子の因子負荷量の高い項目

- Q 23 人の思いが気になる
- Q 22 自分をよく思っていない人がいるのではないかと気になる
- Q 19 人が自分を好んでいるか気になる
- Q 15 人の目が気になる
- Q 21 人を説得している時、人の思いが気になる
- Q 10 人の批評が気になる
- Q 17 失敗が気になる
- Q 9 他の人とうまくやっていけるか気になる

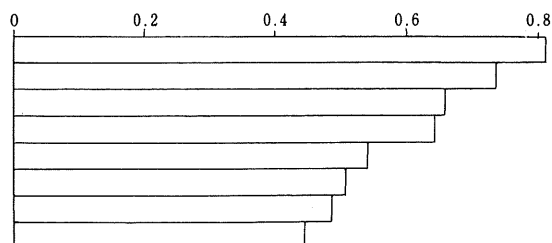
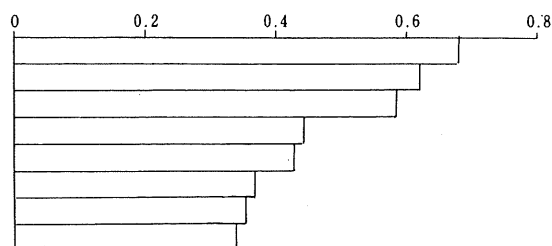


図 1-c 第 3 因子の因子負荷量の高い項目

- Q 12 人の前ではにかむ
- Q 13 グループの前で話すと不安になる
- Q 11 人の中に入っていくことへの不安
- Q 20 恥ずかしい
- Q 14 人前でのゲームを気にする
- Q 10 人の批評が気になる
- Q 16 人との話題に困る
- Q 9 他の人とうまくやっていけるか気になる



Ⅲ 結 果

1 バリマックス法による因子分析

バリマックス法による因子分析の結果、10因子が抽出された。図 1-a から図 1-j は各因子のもつ意味を明確にするために、因子負荷量の絶対値が 0.3 以上の値をもつ項目を大きさの順に並べたものである。

第 1 因子は、図 1-a から「聖書は感謝の念を増させる (Q34)」、「聖書はケアの指針 (Q41)」などの項目の負荷量が高く、『聖書的アプローチに対する肯定的反応』に関する因子と考えられる。

図 1-d 第 4 因子の因子負荷量の高い項目

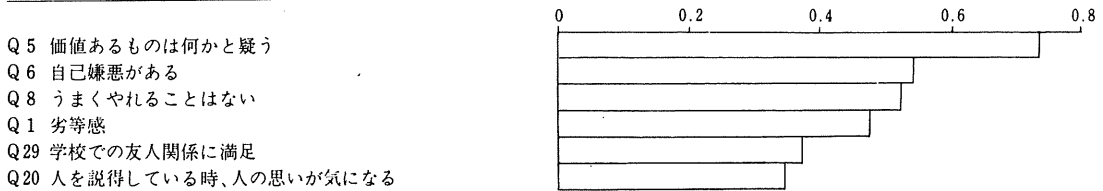


図 1-e 第 5 因子の因子負荷量の高い項目

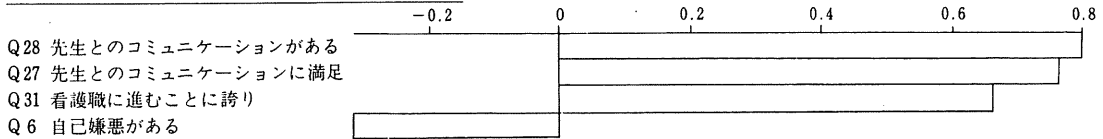


図 1-f 第 6 因子の因子負荷量の高い項目

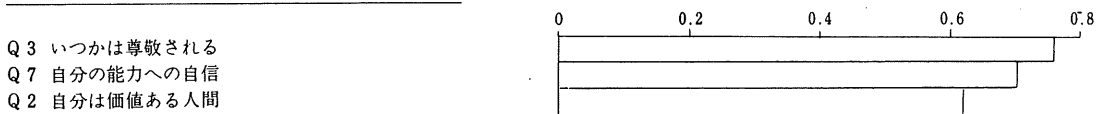


図 1-g 第 7 因子の因子負荷量の高い項目

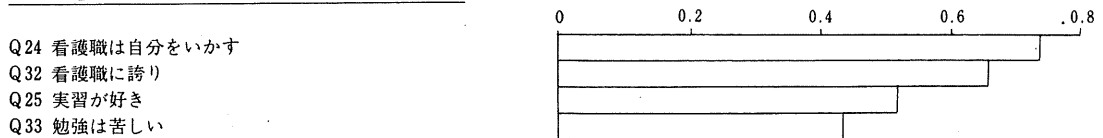


図 1-h 第 8 因子の因子負荷量の高い項目

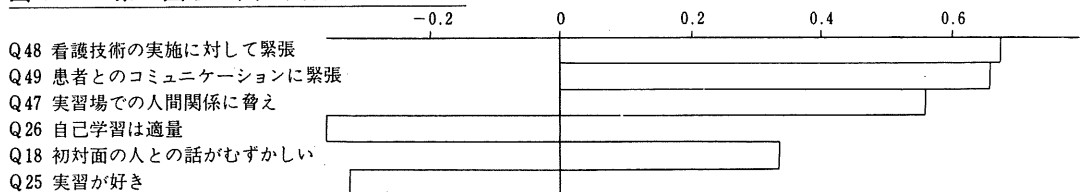


図 1-i 第 9 因子の因子負荷量の高い項目

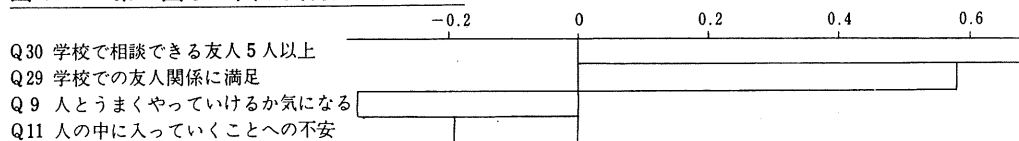
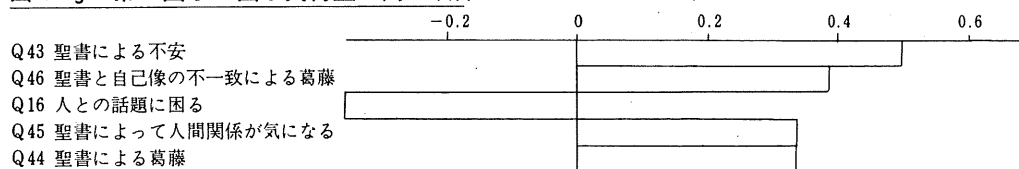


図 1-j 第 10 因子の因子負荷量の高い項目



第2因子は、図1-bから「人の思いが気になる(Q23)」、「自分をよく思っていない人がいるのではないかと気になる(Q22)」などの項目の負荷量が高く『他人の目が気になる』に関する因子と考えられる。

第3因子は、図1-cから「人の前で、はにかむ(Q12)」、「グループの前で話すと不安になる(Q13)」などの負荷量が高く、『低い自尊心』に関する因子と考えられる。

第4因子は、図1-dから「価値あるものは何かと疑う(Q5)」、「自己嫌悪がある(Q6)」などの負荷量が高く『自己嫌悪』に関する項目と考えられる。

第5因子は、図1-eから「先生とのコミュニケーションがある(Q28)」、「先生とのコミュニケーションに満足(Q27)」などの負荷量が高く『教師とのコミュニケーション』に関する因子と考えられる。

第6因子は、図1-fから「いつかは尊敬される(Q3)」、「自分の能力への自信(Q7)」などの負荷量が高く『自信』に関する因子と考えられる。

第7因子は、図1-gから「看護職は自分をいかす(Q24)」、「看護職に誇りを感じず(Q32)」などの負荷量が高く『看護への適応』に関する因子と考えられる。

第8因子は、図1-hから「看護技術の実施に対して緊張(Q48)」、「患者とのコミュニケーションに緊張(Q49)」などの負荷量が高く『実習に対する緊張』に関する項目と考えられる。

第9因子は、図1-iから「学校で相談できる友人5人以上(Q30)」、「学校での友人関係に満足(Q29)」などの負荷量が高く『友人関係に関する因子』と考えられる。

2 因子得点の学年別、調査時期別の分散分析

T校とS校の各学年、また同学年による7月と3月の各因子の差を調べるために因子得点を求め分散分析を行った(表3)。

各校の7月、3月の学年毎の各因子得点の平均値の推移を図2に示した。12グループで有意差の認められた因子は、第1、5、6、7、8、9因子であった(表3)。

1) 聖書的アプローチに対する反応

第1因子『聖書的アプローチに対する反応』に

おいて有意差(1%水準)が認められた。S校は3学年ともに肯定的反応が認められ、T校は否定的反応が認められた。

2) 自尊感情

第6因子『自信』において、有意差(1%水準)が認められた。1年次の7月時点で、T校の学生は、自信を持っているが、S校の学生は自信がない傾向がみられた。この差は1学年の3月以降ほとんど認められない。

3) 看護への適応

第7因子『看護への適応』において有意差(1%水準)が認められた。この差は、S校とT校の相違というよりは、学年間の相違によるものと考えられる。S校、T校ともに高学年になるほど適応が低下する傾向がみられた。

第8因子『実習に対する緊張』において有意差(1%水準)が認められた。S校、T校ともに1年次7月は実習に対する緊張が高いが、3年度になると低下している傾向がみられる。T校は2年次7月に緊張が低下し、S校は2年次3月に緊張が高まるという傾向が認められた。

4) 教師との人間関係

第5因子『教師とのコミュニケーション』において有意差(1%水準)が認められた。1年次においてT校の学生は教師とのコミュニケーションがあり満足しているのに比べ、S校の学生は、教師とのコミュニケーションが充分でない傾向が認められる。2年次になると両校ともコミュニケーションに不満足であるが、高学年になるにつれて両校ともコミュニケーションに満足する傾向がみられる。

5) 友人関係

第9因子『友人関係』において有意差(1%水準)が認められた。S校、T校ともに1年次には、友人関係は不満足であるが2年次になると満足する傾向にある。3年次になると、T校は友人関係が2年次より低下するがS校はよくなる傾向がみられる。

3 学校別の各因子得点の平均値

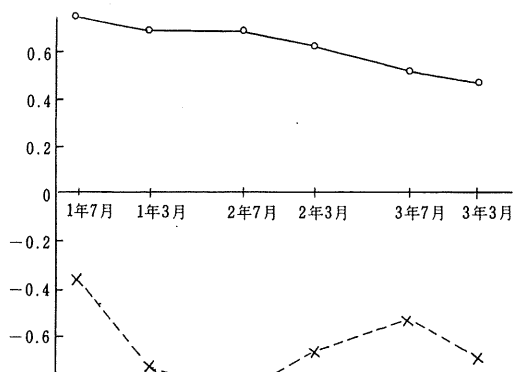
T校とS校の学校別の各因子の差を調べるために、因子得点の分散分析を行った(表4)。

図2 S校とT校における7月、3月の学年毎の各因子得点の平均値

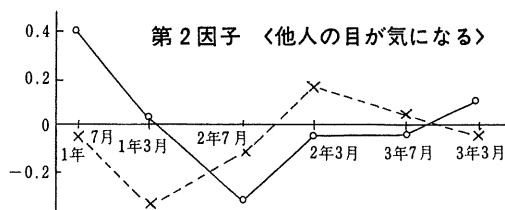
P<0.01 **
P<0.05 *

○—○ S校
×---× T校

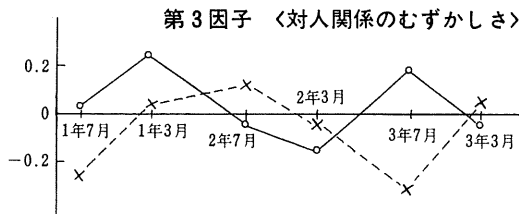
第1因子 ** <聖書的アプローチに対する反応>



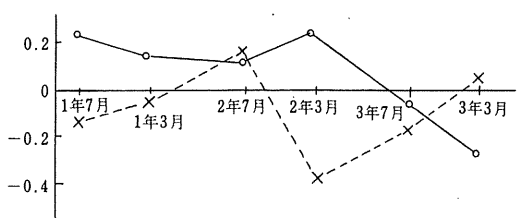
第2因子 <他人の目が気になる>



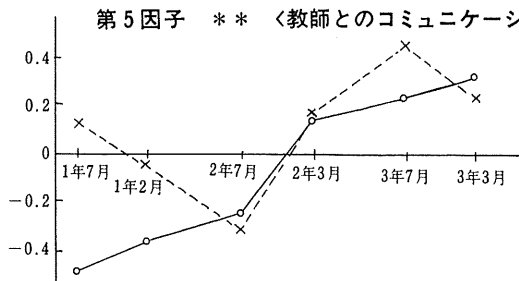
第3因子 <対人関係のむずかしさ>



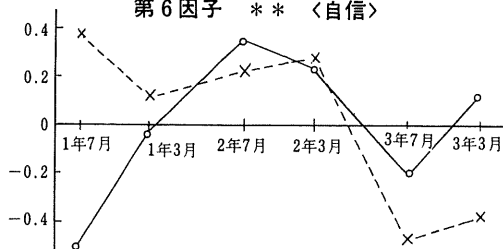
第4因子 <自己嫌悪>



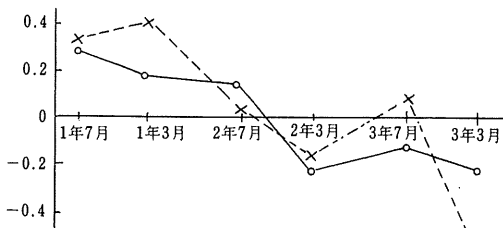
第5因子 ** <教師とのコミュニケーション>



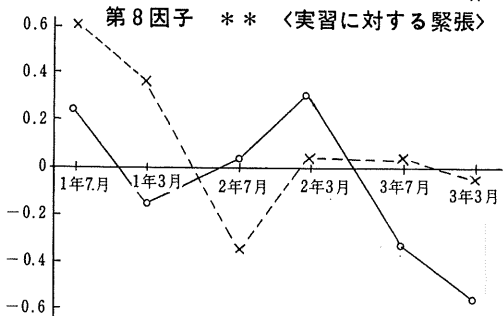
第6因子 ** <自信>



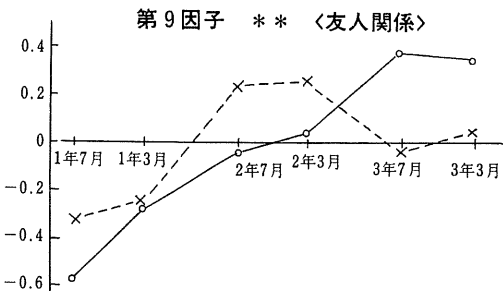
第7因子 ** <看護への適応>



第8因子 ** <実習に対する緊張>



第9因子 ** <友人関係>



第10因子 <聖書による葛藤>

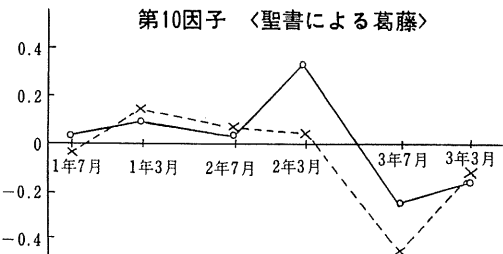


表3 S校, T校における学年毎, 調査時期毎の各因子得点の平均値

		1年 (S校, 7月 $n=40$, 3月 $n=35$) (T校, 7月 $n=19$, 3月 $n=38$)			2年 (S校, 7月 $n=38$, 3月 $n=37$) (T校, 7月 $n=41$, 3月 $n=42$)			3年 (S校, 7月 $n=34$, 3月 $n=34$) (T校, 7月 $n=32$, 3月 $n=37$)			12グループのF値
		平均値	SD	F値	平均値	SD	F値	平均値	SD	F値	
第1因子	S校 7月	0.741	0.600	**	0.692	0.568	**	0.517	0.814	**	28.094
	T校 7月	-0.361	0.854	2.410	-0.847	0.732	7.198	-0.512	0.621	2.692	
	S校 3月	0.691	0.632	**	0.618	0.668	**	0.489	0.937	**	
	T校 3月	-0.714	0.806	5.545	-0.635	1.013	4.759	-0.688	0.722	3.778	
第2因子	S校 7月	0.409	0.833	0.264	-0.315	1.000	0.081	-0.010	0.941	0.001	1.410
	T校 7月	-0.064	1.057		-0.103	1.094		0.015	0.972		
	S校 3月	0.091	1.194	0.172	-0.082	0.936	0.124	0.106	0.850	0.038	
	T校 3月	-0.230	1.021		0.181	0.984		-0.047	0.871		
第3因子	S校 7月	0.021	0.836	0.076	-0.024	1.023	0.041	0.198	0.827	0.389	0.923
	T校 7月	-0.235	1.095		0.127	1.101		-0.312	1.099		
	S校 3月	0.261	0.995	0.088	-0.155	0.921	0.015	-0.076	0.847	0.045	
	T校 3月	0.031	0.932		-0.065	1.138		0.091	0.997		
第4因子	S校 7月	0.235	0.855	0.143	0.112	1.044	0.003	-0.015	0.991	0.037	1.533
	T校 7月	-0.112	0.947		0.155	1.165		-0.170	0.992		
	S校 3月	0.150	0.739	0.068	0.240	0.938	0.709	-0.270	1.03	0.152	
	T校 3月	-0.052	1.039		-0.386	0.974		0.036	0.944		
第5因子	S校 7月	-0.505	0.976	0.505	-0.256	0.803	0.005	0.265	0.848	0.061	3.854
	T校 7月	0.130	0.955		-0.304	1.125		0.460	0.858		
	S校 3月	-0.387	0.907	0.153	0.139	0.984	0.003	0.322	0.974	0.007	
	T校 3月	-0.093	0.865		0.181	1.118		0.257	0.899		
第6因子	S校 7月	-0.518	1.152	1.047	0.355	0.826	0.030	-0.207	0.944	0.125	4.166
	T校 7月	0.392	1.196		0.230	0.783		-0.485	0.896		
	S校 3月	-0.067	1.176	0.065	0.251	0.898	0.003	0.105	0.721	0.436	
	T校 3月	0.125	1.006		0.293	0.823		-0.396	0.963		
第7因子	S校 7月	0.286	0.788	0.002	0.151	0.675	0.009	-0.123	0.985	0.083	3.008
	T校 7月	0.328	1.281		0.081	1.216		0.107	0.844		
	S校 3月	0.118	0.903	0.138	-0.222	0.927	0.004	-0.238	0.812	0.200	
	T校 3月	0.401	1.015		-0.179	1.114		-0.582	0.926		
第8因子	S校 7月	0.248	0.898	0.159	0.037	0.966	0.282	-0.326	0.856	0.269	3.805
	T校 7月	0.605	0.834		-0.346	1.030		0.084	0.831		
	S校 3月	-0.162	1.213	0.505	0.306	0.854	0.118	-0.566	1.111	0.402	
	T校 3月	0.371	0.800		0.057	1.008		-0.084	0.886		
第9因子	S校 7月	-0.595	1.015	0.102	-0.010	0.877	1.324	0.395	0.897	0.279	3.620
	T校 7月	-0.309	0.666		0.227	0.954		-0.023	1.120		
	S校 3月	-0.291	1.146	0.000	0.076	0.983	0.058	0.389	0.843	0.188	
	T校 3月	-0.276	0.995		0.250	0.898		0.058	0.880		
第10因子	S校 7月	0.075	1.084	0.008	0.064	1.104	0.002	-0.232	1.051	0.080	1.569
	T校 7月	-0.009	1.063		0.094	0.878		-0.462	0.943		
	S校 3月	0.109	1.140	0.001	0.362	1.082	0.174	-0.153	0.849	0.000	
	T校 3月	0.129	0.826		0.052	0.743		-0.150	0.974		

P<0.01 ** P<0.05 * F値は対比較, Schéffe の方法

表4 学校別の各因子得点の平均値

		標本数	平均値	SD	t 値
第1因子	S	218	0.629	0.716	** 17.294
	T	209	-0.656	0.818	
第2因子	S	218	0.036	0.993	0.755
	T	209	-0.037	1.011	
第3因子	S	218	-0.034	0.926	0.721
	T	209	0.036	1.075	
第4因子	S	218	-0.083	0.957	1.755
	T	209	0.087	1.040	
第5因子	S	218	0.084	0.976	1.776
	T	209	-0.088	1.021	
第6因子	S	218	-0.017	1.018	0.363
	T	209	0.018	0.985	
第7因子	S	218	-0.004	0.877	0.082
	T	209	0.004	1.119	
第8因子	S	218	-0.061	1.037	1.296
	T	209	0.064	0.960	
第9因子	S	218	-0.022	1.033	0.472
	T	209	0.023	0.969	
第10因子	S	218	-0.044	1.078	0.926
	T	209	0.046	0.915	

* P<0.05 ** P<0.01

第1因子『聖書的アプローチに対する反応』に有意差(1%水準)が認められた。S校は、聖書的アプローチに肯定的反応がみられT校は、否定的反応がみられた。

IV 考察

1 自尊感情

図2の第2因子「他人の目が気になる」は両校とも似たような傾向である。T校においては、3年次3月に「自信」の低下がみられる。同じ時期に「自己嫌悪」、「実習に対する緊張」が上昇傾向

にあり、不適応状況と思われる。おそらく3年次の実習を中心とした学習困難によるものと思われる。この時期の教師のサポートが望まれる。

S校の「劣等感(Q1)」は、1年で高く3年次の3月に低下している。また図2第4因子「自己嫌悪」も同様な傾向であり、これに対応して図2に示したように、第6因子「自信」は、1年7月に低いが、3年次3月に上昇傾向を示している。これは「看護への適応」で後述するように教師のサポートを強化したための反応と思われる。

特に第4因子「自己嫌悪」は、S校ではT校に比べ、1年次より2年3月まで横ばい状態で高く3年次にはじめて下降している。したがってS校の場合、この傾向に対応して第6因子「自信」は上昇し、「実習に対する緊張」も低下しており、適応への方向性がうらづけられているといえよう。

「自己嫌悪」が「自己肯定」へと変容するまでのプロセスには、聖書的アプローチの影響も関与しているものと考えられる。S校単独の因子分析の結果では、第3因子「劣等感」、第6因子「低い自尊心」、第7因子「自己嫌悪」などが自己概念要素が因子として抽出された(図3)。

これは、環境に対する否認が生じやすく「傷つきやすさ」の特性をT校に比較しS校が持っていることを示すものと考えられる。これは、学生の出身地の差にもよると考えられるが、「寮生活」という環境による他人との比較を通じて形成された自己像を示すものとも考えられる。このような学生の感情や体験が自己概念に矛盾する、いわゆるストレス状況の強い学習環境での自己肯定への変容を促すためには、第8因子「看護への適応」

(Q2自分は価値ある人間、Q24看護職は自分を生かす)を高めるために教師の援助は、重要な役割を占めるものである。個々の教師の人間性と努力が問われるところである。

図3 S校のデータを用いた因子分析結果(バリマックス法による因子負荷量)

図3-a 第1因子の因子負荷量の高い項目

(聖書的アプローチに対する肯定的反応)
 Q35 聖書は看護職に対する誇りを増させる
 Q41 聖書はケアの指針
 Q36 聖書は「天職への召命」とする
 Q34 聖書は感謝の念をまさせる
 Q39 夕の祈りは感謝を与える
 Q38 朝の祈りは力を与える
 Q40 朝礼により自己肯定
 Q37 聖書は臨床場面で判断基準の指針
 Q32 看護職に誇り
 Q25 実習が好き

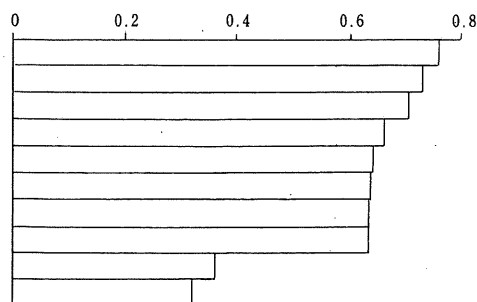


図 3-b 第 2 因子の因子負荷量の高い項目

- (他人の目が気になる)
- Q 23 人の思いが気になる
 - Q 22 自分をよく思っていない人がいるのではないか気になる
 - Q 19 人が自分を好んでいるか気になる
 - Q 21 人を説得している時、人の思いが気になる
 - Q 9 他の人とうまくやطيعいけるか気になる
 - Q 15 人の目が気になる
 - Q 10 人の批評が気になる
 - Q 17 失敗が気になる
 - Q 6 自己嫌悪がある

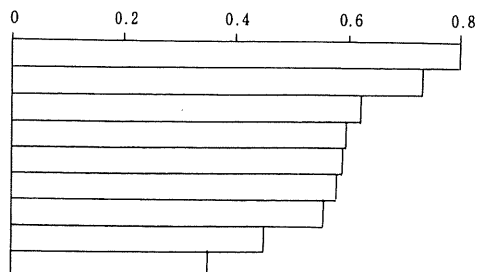


図 3-c 第 3 因子の因子負荷量の高い項目

- (劣等感)
- Q 7 自分の能力への自信
 - Q 13 グループの前で話す不安になる
 - Q 3 いつかは尊敬される
 - Q 12 人の前ではにかむ
 - Q 20 恥ずかしい
 - Q 48 看護技術の実施に対して緊張
 - Q 2 自分は価値ある人間
 - Q 18 初対面の人との話がむずかしい
 - Q 49 患者とのコミュニケーション
 - Q 1 劣等感
 - Q 8 うまくやれることはない

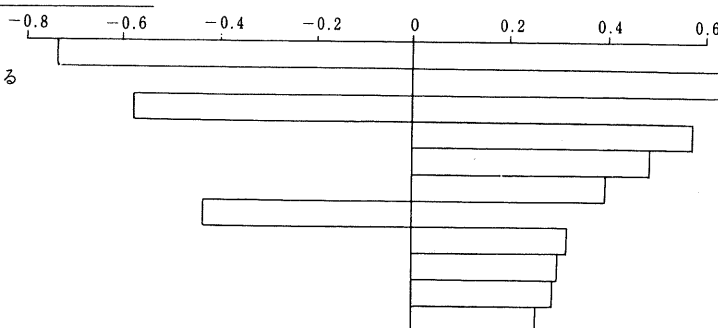


図 3-d 第 4 因子の因子負荷量の高い項目

- (教師とのコミュニケーション)
- Q 28 先生とのコミュニケーションがある
 - Q 27 先生とのコミュニケーションに満足
 - Q 31 学校で相談できる先生がいる
 - Q 29 学校での友人関係に満足
 - Q 6 自己嫌悪がある
 - Q 33 大学での専門の勉強は苦しい
 - Q 1 劣等感
 - Q 30 学校で相談できる友人が 5 人以上

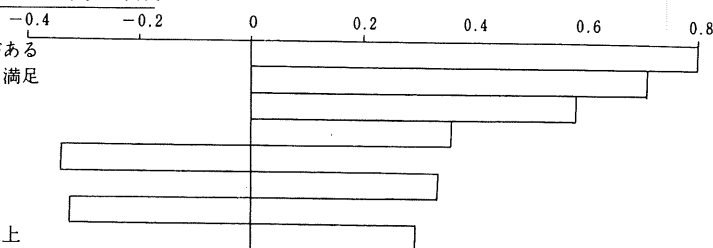


図 3-e 第 5 因子の因子負荷量の高い項目

- (聖書による葛藤)
- Q 43 聖書による不安
 - Q 46 聖書と自己像との不一致による葛藤
 - Q 45 聖書によって人間関係が気になる
 - Q 44 聖書による葛藤
 - Q 42 人間関係は聖書が基盤

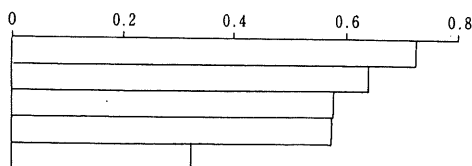


図 3-f 第 6 因子の因子負荷量の高い項目

- (低い自尊心)
- Q 16 人との話題に困る
 - Q 18 失敗が気になる
 - Q 49 患者とのコミュニケーションに緊張
 - Q 25 実習が好き
 - Q 19 人が自分を好んでいるか気になる
 - Q 11 人の中に入っていくことへの不安
 - Q 17 失敗が気になる
 - Q 4 ミスは自分のせい
 - Q 48 看護技術の実施に対して緊張
 - Q 1 劣等感

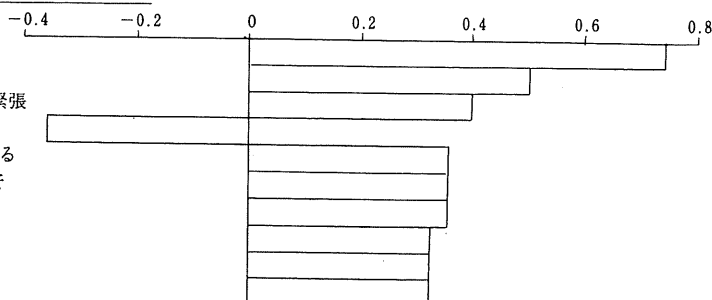


図3-g 第7因子の因子負荷量の高い項目

- (自己嫌悪)
Q 5 価値あるものは何かと疑う
Q 6 自己嫌悪がある
Q 8 うまくやれることはない
Q 10 人の批評が気になる

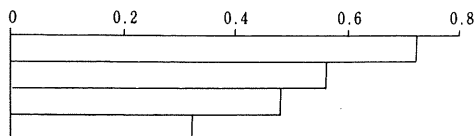
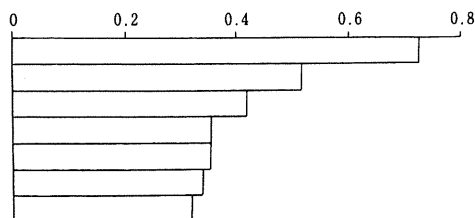


図3-h 第8因子の因子負荷量の高い項目

- (看護への適応)
Q 24 看護職は自分をいかす
Q 31 学校で相談できる先生がいる
Q 25 実習が好き
Q 14 人前でのゲームを気にする
Q 2 自分は価値ある人間
Q 35 聖書は看護職に対する誇りを増させる
Q 33 勉強は楽しい



2 聖書的アプローチに対する反応

図2によるとT校とS校の比較では、第1因子においては、各学年共1%水準の有意差がみられた。T校の「聖書的アプローチに対する反応」は低い、あくまでも拒否の状態ではなく寮生活におけるアプローチがないための当然の反応と思われる。むしろT校の学生の反応が、3学年を通じて横ばい状態であることは、寮生活のない状況において評価されるべきものと考えられる。

S校では、1年、2年と因子得点がある程度高いが、第10因子の「聖書による葛藤」に対する傾向は、3年7月より下降気味になる。これは、学生の内省化の過程で「新鮮さ」に欠けるアプローチが問われているように思われる。いずれにしても福音的価値と看護実践や日常生活に与える知情意の統合という点では、今後一層取り組むべき課題である。

3 看護への適応

第7因子「看護への適応」においては(図2)、両校とも3年7月まで大差がない。T校においては、3年3月の適応が低下し、実習に対する緊張がS校に比べて強い。また第8因子1年次T校の「実習に対する緊張」は、実習環境によるものか、実習目標が高すぎるためなのか継続的評価の必要があると思われる。

S校の2年3月に高まる緊張については、本学37期、38期生を対象に比較検討した「臨床実習における看護学生のコンフリクトについて(Ⅱ)」の研究で報告したとおりである。¹³⁾ すなわち、この時期の実習が他院での実習であることやアセスメントに関する緊張の反応である。第7因子「看護

への適応」のS校2年3月から3年3月までの横ばい状態は、「内的には強く動機づけられているが、しかし行動上では達成感が得られないでいる学生像」としてみることができる。前述の研究報告(本学紀要 第2号P. 45)によると「37期生と38期生の看護過程、態度ともできるようになりたいのにできないという不一致感を持った学生が減少していること、また学生の不一致感の軽減がもたらされている」状況と考えられる。

両校いずれも1年次の学生の実習状況における緊張の高いことが推測できる。S校では、「看護技術の実施に対して緊張(Q49)」などに関して1%水準で有意差が認められ、学生の消耗が強いと思われる。過剰な緊張状態から解放され、学習効果があげられるよう教師の努力が必要と思われる。

4 教師、友人関係

S校においては、臨床実習指導に関するアプローチについて研究会を重ねた経過があり第5因子「教師とのコミュニケーション」では、1%水準で有意差が認められる(図2)。S校の場合、「学校での友人関係に満足(Q29)」は、1%水準で「学校で相談できる友人がいる(Q30)」は、5%水準で有意差があり高学年になるほど高くなっている。これは、S校の寮生活による人間関係を意味すると思われる。T校における「友人関係」は、寮生活がなく3年次の7月から得点値が下降している。

学生寮の管理は、「他人の目を気にする」傾向にある青年期の特性をふまえ、寮生活での人間関係が学生個々人の自己概念に及ぼす影響を考慮し、指導してゆかねばならないだろう。

V 結 論

1 因子分析

2校間の看護学生の自尊感情と学習環境の受容に関する因子を調べるために因子分析を行った結果、10の共通因子が抽出され下記のように意味づけた。

- 1) 聖書的アプローチに対する反応
- 2) 他人の目が気になる
- 3) 対人関係のむずかしさ
- 4) 自己嫌悪
- 5) 教師とのコミュニケーション
- 6) 自信
- 7) 看護への適応
- 8) 実習に対する緊張
- 9) 友人関係
- 10) 聖書による葛藤

2 今後の課題

1) 自尊感情

看護婦役割を体得する過程では、両校の学生とも「傷つきやすさ」の環境の中で、「自己嫌悪」、「劣等感」、「緊張」を体験し、「他人の目を気にしている」という状況があると思われる。教師は、学生の傷つきやすい学習過程を共感し、理解的態度でのサポートが重要と思われる。

2) 聖書的アプローチに対する反応

T校においては、3年次の「自己嫌悪」が高く

なりこの時期の指導が、重要と思われる。両校とも福音的価値と看護実践の統合をめざした学生へのアプローチは、課題であると思われる。

3) 看護への適応

両校いずれも、1年次の学生の「実習に対する緊張」すなわち「看護技術の実施」や「患者とのコミュニケーション」に関する緊張が、強いことを示していると思われる。したがって、教師は、学生が過剰な緊張からなるべく解放されて学習成果をあげられるように努力を続けていかなければならないだろう。

4) 教師・友人関係

S校の1, 2年度の学生と教師のコミュニケーションが、低下している。この点でひとつには、1年次のカリキュラムが「講義」を中心に展開される傾向があり、演習やセミナー形式の工夫も検討の余地があると思われる。

VI おわりに

同じ教育理念をしかける両校の看護学生と学習環境の相異による学生の看護への適応状態の差を検討し考察した。学生の不適応因子や時期的変化にともなう課題に関しては、今後さらに取り組み努力してゆきたいと考えている。

本調査にあたりまして天使女子短期大学学長 Sr. 外崎をはじめ学科長 Sr. 女鹿、そして教職員の皆様、両校の看護学生の皆様に深く感謝申し上げます。

引用文献

- 1) Rogers, Carl R.: (村山正治編訳), ロージャズ全集12, 人間論, 初版, 26, 96, 岩崎学術出版社, 東京, 1968.
- 2) Coopersmith, S.: The Antecedents of Self-Esteem, Freeman Publishing Company, San Francisco, 1967.
- 3) 筒井真優美他: 看護学生の自尊感情と学習環境に関する調査, 全国看護教育研究会誌, No.17, 3—15, 1985.
- 4) 和田サヨ子, 高木廣文: 聖書的アプローチの自尊感情に及ぼす影響, カトリック教育研究, No. 3, 64—75, 1986.
- 5) 和田サヨ子, 筒井真優美他: 看護学生の自尊感情と学習環境に関する研究(その2) 聖母女子短期大学紀要, 第2号, 27—36, 1988.
- 6) 沢礼子, 和田サヨ子他: 看護学生の自尊感情と学習環境に関する研究, 第8回日本看護科学学会誌, 36—37, 1988.
- 7) 中西信男他編: 心理学10, 自我: 自己, 初版, 197—210, 有斐閣双書, 東京, 1981.
- 8) 波多野梗子他: 看護学習および看護職に対する態度の発達の变化, 看護教育, 23: 8, 513—520, 1982.
- 9) 伊藤暁子他: 看護学生の生活と看護教育に対す

る考え方, 看護実践の科学, 10: 3, 18—42, 1985.

- 10) 坂口けさみ他: 看護短大学生の生活の実態調査, 東京女子医科大学看護短期大学紀要, No. 3, 33—43, 1981.
- 11) 柳井晴夫, 高根芳雄: 現代人の統計 2, 多変量解析法, 118—120, 125—128, 朝倉書店, 東京, 19

77.

- 12) 柳井晴夫, 高木廣文編著: 多変量解析ハンドブック, 現代数学社, 1986.
- 13) 佐藤栄子: 臨床実習における看護学生のコンフリクトについて(Ⅱ), 聖母女子短期大学紀要第2号, 37—47, 1988.

参考文献

- 1) 衛生看護学科・専攻科衛生看護学専攻教員一同, 天使女子短期大学の教育理念に基く衛生看護学科のカリキュラムの展開, 天使女子短期大学紀要, No. 9, 1988.
- 2) 和田サヨ子: 本学教育理念に基づく臨床実習指

導の考察, 聖母女子短期大学紀要No. 2, 48—54, 1988.

- 3) 岡崎清子, 和田サヨ子, 本学におけるケース・スタディのねらい, 聖母女子短期大学紀要, No. 2, 55—62, 1988.

[編集委員会付記]

本論文は和田サヨ子教授が聖母女子短期大学に在職中に執筆されたものである。

なお, 本論題と同じテーマの〈その3〉は第8回日本看護科学学会(昭和63年12月4日, 立教大学)にて発表された。